

犯人当て小説『ザ・ラスト・トリック』 解答編

「虹村水樹を殺した犯人は、この中にいる」

俺は最初、その台詞を言ったのが誰なのか、本気でわからなかった。その中身に衝撃を受けながらも、周囲に隙なく視線を配りつつ、次なる一撃を待つ。ところがどうしたことか、江戸釜先輩も笹木先輩も栖川さんも浦駕さんも彰吾も、誰一人として先を続けようとはしない。それどころか、俺のことをじっと見つめているじゃないか。

それでようやく、俺はその言葉が、自分の口を突いて出たものであることを悟った。ヤバイ。マジでヤバイ。なにをとち狂ってるんだ俺は。大体、この中で推理小説ファン歴が一番短いのもどう考えても俺だぞ？ そんな俺が、皆に先んじて真相らしきものに辿り着いちやうなんて、あるわけねーじゃん。

——いや、でも、ちよつと待てよ。

俺はこの別荘にやってくるまで、これまでに目の前で起こってきた様々な出来事を、頭の中でトランプのカードを並べるように整理していった。あのとき、あの人がああ言って、あの人がこう答えた。ニースが流れて、停電があつて、それから——。

そうか、そういうことか。だからメモが『たしろ』だ『たつた』のか。

「ねえ、麻蘭くん？」

笹木先輩が心配そうに俺の顔を覗きこんだ。

「まだ混乱してるんじゃないかやあ。すこし休ませてやった方がいいぞね」

「……いや、大丈夫ですよ、江戸釜先輩。俺、全部わかっちゃいました。水樹を殺した犯人が誰なのか。それと、謎の連続殺人鬼『メッセンジャー』が残したメッセージの意味も」

「それは本当か！」

「ほほほ、本当ですか？」

彰吾と浦駕さんが大声で聞き返してくる。

俺は黙って頷くと、皆を焦らせるように数歩だけ前に出た。そこで徐に振り返って、俺以外の五人全員が、視界の中に入ってくる位置を確保する。

「……麻蘭くん、それ、本気の本気で言っているの？」

さっきのやり取りもあつて、笹木先輩の声は少し涙ぐんでいた。謝罪の言葉を並べるべきかどうか迷ったけど、今は、もうそんなときじゃない。

「先輩。水樹の死を、軽々しく扱いたくないって先輩の気持ち、わかります。でも、すこしだけ、俺に時間をくれませんか。俺のこと、信じてもらえませんか」

視線が交差する。尚も無言で訴えかける。

笹木先輩は真面目な顔で、コクリと頷いてくれた。

「……うん、わかった。信じる」

「ありがとうございます」

俺は一礼だけすると、意図的に声のトーンを揚げて、右手の人差し指を突き立てた。「それじゃまず、水樹が部屋から消えた謎について考えてみるツス。リビングには絶えず人がいたのに、誰もリビングを通っていく水樹の姿を見ていません。必然的に、水樹は窓から外に出たと考えられるツス」

早速、彰吾が囁みついてくる。

「窓から？ それはあんじゃあないかな。ホフ、窓は内側から鍵がかかっていたわけだし。どちらかと言ったら、停電のときの方が怪しいだろう」

「そうだにやあ。こつ、真つ暗になったところを、ダーツと」

「いいえ、そもそも停電が起きたのは、ほかの電化製品の使用と、栖川さんの電子レンジのタイミングが、たまたま重なったせいツスよ？ ただの偶然にすぎないんす。その瞬間を狙って、誰にも気づかれずにリビングを駆け抜けるなんて、まず無理ツス」

「ほかの電化製品……あ、そういえば水樹ちゃん、凄く強力なドライヤーを持ってきていたよ。それじゃないかな？」

「いや、妹は風呂に入っていないんだから、ドライヤーを使う理由がない」

「あれ？ そういえばそうだね。エート、それじゃ、エアコンかな？」

「それもどうだろう……大体、自分のせいで停電になったんだしたら、様子を見るために部屋から出てくるんじゃないか？ 僕が思うに……水樹はきつと、あの停電を利用して、『メッセンジャー』に連れ去られたんだ。停電が起きた理由はわからないが、とにかく水樹はあの瞬間、リビングに入ってきていたに違いない。すこし休んで、体調が回復したのかもしれない。そして同時に、『メッセンジャー』もまた、玄関側のドアからこのリビングに侵入していたんだ」

オイオイ、なんだよそのムチャクチャな推理は。栖川さんなんてちよつと呆れてるじゃないか。

俺は速攻で否定する。

「いや、それじゃ駄目だね」

「何故だ？」

「あのとき、リビングの玄関側には江戸釜先輩が寝転んでたんすよ。玄関では浦駕さんが電話をかけていました。侵入者や、外に出て行く人間がいたとしたら、どっちかは気づきますよ。浦駕さん、江戸釜先輩、どうですか？」

「うん、全然大丈夫」

「……そうですね。いなかっただと思います」

自信満々に頷いた江戸釜先輩と、首を傾げながらもとりあえず肯定してくれる浦駕さん。いや、どっちかつかつたら、アルコールで酔っ払った江戸釜先輩の方が自信無さげにするべきでしょう。どうでもいいけど。

尚も反論しようとする彰吾だったが、栖川さんが「わたしも麻蘭くんの意見に賛成です」と俺の味方宣言をしてくれたせい、悔しそうに黙りこんだ。ざまあみろ。

「でも、それだと鍵はどうなるちやうの？ 窓には内側から鍵がかかっていたんでしょ？」

「わかってます。つまり必然的に、あの部屋の窓の鍵は、水樹以外の誰かが、水樹が窓から外に出た後でかけた、ということになるツスよ」

「これによごによごによごん。ちよつと待ち給え、麻蘭くん。するとなにかね、『メッセンジャー』は、水樹嬢の部屋の窓からこの山荘内に侵入してきて……ひよつとして、まだこの中にいるってことかなもし？」

「ええつ、ウソでしょう？ やだやだ、怖いよう麻蘭くん」

「な、なるほど。だから麻蘭さんは先ほど、『犯人はこの中にいる』と」

「いやいや、それは違うツスよ、浦駕さん。水樹がいなくなった後、人が隠れられそうなおスペースは俺が風潰しに調べています。水樹が部屋に戻ったとき、あいつが部屋のドアに鍵をかける音を、俺と笹木先輩が聞いているツス。ところが次に様子を見に行つたとき、ドアの鍵は開いていました。このことから、水樹と犯人の行動経路が推理できる。部屋にこもった水樹は、理由はさて置き、自分の意思で窓から外に出た。このとき、ドアに鍵はかかっていたツス。それからしばらくして、犯人が水樹の部屋に忍び込み、内側から窓の鍵をかけた。で、ドアの鍵を開けて、廊下に出たわけツスね。その犯人が廊下に出た後とこに行つたかという、逃げる経路も、隠れる場所もないわけですから、まだこにいるんすよ」

俺はそこまでを一気に説明すると、リビングの中央を横切つて、ゆっくりとソファに腰を下ろした。

「……水樹を殺した犯人は、俺たち六人の中にいるんだ」

「うーん、言うてることはわかるけれども、ちよつと推理が恣意的すぎやしないかね」

「でもこう考えると、停電の原因も説明できるんすよ。さつき彰吾が、風呂に入つていない水樹

がドライヤーを使うはずがないって指摘しましたよね。でも、俺はやっぱドライヤーは使われたと思うんすよ。ただし、使ったのは水樹じゃない。犯人です」

「犯人が？ なのために？」

「水樹の部屋に、窓から忍び込んだ痕跡を消すためツス。犯人が窓から忍び込んだとき、外は激しい雨だった。ひさしはあるけど、窓の周辺はどうしたって濡れてしまう。犯人はそれを乾かすために、ドライヤーを使ったんです。それが偶然、栖川さんの電子レンジとかち入っちゃって、ブレーカーが落ちた」

彰吾は少しも納得できないといった様子で、再び反論してくる。

「……なのためにだ？ いや、犯人じゃない。妹だ。妹は何の理由があつて、窓から外に出たりしたんだ？ そりゃあ、あいつはちよつと変わった奴だったけど、外に出たいなら、普通に玄関から出ればいいじゃないか」

「それはそうですね」

「そのことは、ひとまず脇に置きましょう。ただ、犯人としては、水樹が自分から窓の外に出たとは思われたくなかった。だから最後に、窓の鍵を閉めてから部屋を出たんです。そしてその結果、密室からの人間消失なんという、おかしな謎が生まれてしまったんすよ」

「……あつ！ ひよつとして、私と麻蘭くんが、水樹ちゃんの様子を見にいったから？ それで、麻蘭くんが水樹ちゃんを探したから？」

「そうツス。十時半ごろに、俺と笹木先輩で水樹の様子を見に行きました。ノックしても返事がなくて、ドアノブを握ったら鍵が開いていた。部屋の中は空っぽでした。ここで俺が、多分トイレにでも行つてるんだろうと諦めていたら、人間消失なんて謎は発生しなかった。ところが俺は即座に家捜しを始めた。結果、水樹が山荘内にいないことが、犯人が予定していたよりも遙かに早く発覚してしまつたんす。水樹の不在発覚は、本当は翌朝になるはずだったんすよ。深夜になれば、リビングの人々はそれぞれ個室に戻っていく。水樹はその後で、普通に玄関から出て行つたことになるはずだった」

「なるほどねー。たしかにそうなつていたら、犯人は外部犯ということになつていたかもしれないやー。麻蘭くん、君って意外と頭切れるんだに、ちよつとだけ見直したぞな」

江戸釜先輩が珍しく褒めてくれたので、俺はちよつとだけ心が軽くなった。

「麻蘭くん、ちよつといいかしら？」

北欧美人の栖川さんがそう言って律儀に右手を挙げる。

「今の推理、私はとても論理的だったと思う。でも、その推理では水樹さんの遺体に残された、メッセージの謎が解けない。『メッセンジャー』事件で、第四の被害者に残された平仮名のメモと、水樹さんの遺体に残されたメモとでは、四文字目までが一致しています。第四の被害者が公表

されたのはついさっきで、メモの内容はニュースには流れませんでした。私たちには四文字目を知る手段がありません。犯人が『メッセンジャー』ではなく、私たちの中にいるというのなら、どうやって四文字目を一致させたのでしょうか？……警察の報道規制を掻き潜った、なんて答えてあげ、駄目ですよ！」

「そもそも、そうですね。ホードキーサー、ですよ。麻間くん、やっぱり、私たちの中に水樹ちゃん殺した犯人がいるなんて、あるはずないよー！」

「……あの、わたしもそう思います。皆さんとは、知り合ってからまだ間もないですが、お友達のために泣くことができる、立派な方ばかりじゃないですか。ないですよ、そんなこと」

その台詞に白けた空気を感しながら、俺はそれでも自信を持って断言した。

「……いいえ。それでもやっぱり、犯人は、俺たちの中にいるんですよ。そして、もうひとつ。連続殺人鬼『メッセンジャー』もまた、この山荘にいます」

『ええっ？』

数人の驚きの声が、偶然にも重なった。心の片隅に小さな優越感が生まれそうになるのを、驚掴みにして握り潰す。こんなのは推理でも何でもない。ただ単に、俺自身が被害者だから、たまたま他の人より先に真実を知ることができたに過ぎない。いい気になるな、俺。

「……それ、本気で言っているのか？ 僕たちの中に、あの連続殺人鬼がいるだって？」

彰吾の声に、殺気に近いものが籠められているのを感じた。敢えて無視して先を続ける。

「それじゃあ次に、メッセンジャーの謎を考えてみるッス」

俺はローテーブルの上の見取り図と、ペンに手を伸ばすと、紙を裏返して、そこに『たしろ』と書いた。水樹さんと彰吾がテーブルの反対側に、浦駕さんが俺の右斜め後ろに回って、ソファの隣には笹木先輩が――座ってくれない。江戸釜先輩が勢いをつけてダイブしてきた。ああもう、空気を読めよな、このオッサンはよう！

「下手な字だにやー」

「放っておいてください。いいですか、これは第四の被害者の現場に残されていたというメモですよ。よく見てください。この『たしろ』って、逆さに読むと、『ころした』になりますよね？」

「ああ、ホントだにやー！」

「もちろん、これだけじゃあ意味不明ですよ。でも俺は、これが実は、もっと長いメッセンジャーの一部なんじゃないかと思ってます。誰かが殺したって文章の、後半部分なんじゃないかって」

「なるほど。その、可能性はありますね」

背後から浦駕さんの声。

「それじゃあ、文章の前半部分はどこにあるのか。俺は、そこに数字が関係しているんじゃないかと思いました。数字は、ただの通番じゃない。そして江戸釜先輩が指摘したように、『メッセンジャー』は殺す相手の名前をちゃんと調べている。意図的に名前を選んでるんですよ。そこで閉まりました。名前と数字を組み合わせればいいんじゃないかって。試しにこれまでの被害者の名前から、数字番目の文字を抜き出してみます」

俺は『ころした』の下に、被害者の名前を書き出していった。

第一の被害者、高田武史(たかた・たけふみ)、数字は『1』、一番目の文字は『た』。

第二の被害者、鮎樫鉄也(あゆかし・てつや)、数字は『2』、二番目の文字は『ゆ』。

第三の被害者、横見路青史(よこみろ・せいし)、数字は『3』、三番目の文字は『み』。

第四の被害者、佐東湯谷(さとう・ゆや)、数字は『5』、五番目の文字は『や』。

「……そして、第五の被害者、虹村水樹(にじむら・みずき)の数字は『5』、五番目の文字は『み』です。江戸釜先輩、続けて読んでください」

「なになに、『たしろ』、たゆみやみ？ なーんじゃあ、そりやー」

「違いますよ、逆です、逆さに読んでください」

「あ、そっか。えーと、『みやみゆた、ころした』？ なーんじゃあ、そりやー」

「みやみゆた、ころした、みやみゆた、ころした……えっ？ まやみゆた、が、ころした？」

『ええーっ！』

小声でメッセンジャーを繰り返していた笹木先輩が、とんでもない方向に内容を捻じ曲げたせいで、再び声が重なる。今度のは、ほとんど絶叫だ。視線が一斉に俺に集中した。

「ウッソ、麻間くんが犯人だったの！？」と笹木先輩。

「随分と手の込んだ自信をするのね、麻間くん」と水樹さん。

「……畜生、こいつは意外だったぜ。まさか、朗々と推理を語っていた一見して探偵役が、実は犯人だったとはな……」と彰吾。

「いや本当に、意外でしたわー」と浦駕さん。

「こにこにこによーん。麻間くん、君には失望したぞなー」って、うるさいよもうー！

なんなんだ、この「麻間の推理はどうも間違ってたみたいだから、実は冗談でした、みたいな感じでフォローしてあげよう」っていう有耶無耶な雰囲気は――

「ちよ、ちよ、ちよと、違いますよ！ 俺じゃないッスよ！ ホラ、ちゃんと読んでくださいよ。」

出来上がったメッセンジャーは『みやみ・ゆた』、俺は『まやみ・ゆた』で、一文字違っじゃないですか。

後半部分も、『がころした』じゃありません。平仮名のメモは『たしろこた』なんだから、逆から読んだら『だころした』でしょう？」

「それはアレなりよ、『がころした』の、ちよととカクコイ言い方版なりよ。D.A.殺した。なんか外国の殺し屋さんみたいぞな」

うわあ。マジ殺してえ。

「違います。マジで俺じゃありません。ただ……」

「ただ……なに？ やっぱ、俺がやりました？」

嗚呼、笹木先輩、貴女までそんなことを。泣いちゃいますよ、俺は。

「だーかーらー。そうじゃなくて。ただ、『メッセンジャー』が作ろうとしていた本当のメッセージは、きつとそうなんだと思います。『まやみゆた・がころした』……このメッセージを残すことこそが、『メッセンジャー』の目的だったんですよ」

「……『メッセンジャー』の目的？」

「そうッス。この事件に『メッセンジャー』が関わっていて、それでこの『みやみ・ゆた』というのが、俺と一文字違っただけというのは、ちよとと偶然が過ぎると思っくんすよ。『メッセンジャー』が名前に『ま』が含まれている人間を殺して、現場に『ま』の順番の数字を残したんだったら、まだ納得がいきます。ところが殺されたのは、名前に『ま』が入らない虹村水樹だった。『メッセンジャー』の目的が『まやみ・ゆた』だったと仮定して、どうして最後の一人に限って法則に当て嵌まらない人間を殺したんでしょうか？」

俺の問いかけに小首を傾げながら、潤んだ目で見つめ返してくる笹木先輩。これが謎解きの最中じゃなかったら抱き締めちゃうんだけどなあ。江戸釜先輩も、彰吾も、浦駕さんも、黙りこんでしまつて返事がない。応えてくれたのは、やはり栖川さんだった。

「ひよとして……メモが一文字、違っていることが関係ありますか？」

「え、なに、どういうこと？」

「さすが栖川さん。仮に第五の被害者が『まやま・ままる』という名前だったとしても、完成するメッセージは『まやみゆた・だころした』で、いまいち意味が通りません。それじゃあ、『だ』の部分で『ま』だったとしたらどうか。『まやみゆた・ま』となりませんが、見ての通り、俺は死んでません。それじゃあ『だ』の部分で、さっき笹木先輩が間違えたように、『が』だったとしたら。『まやみゆた・がころした』で文章として成立します。被害者の名前を間違えるというのは、まあ、ありえない話じゃない。問題はメモの方なんです。あのメモを書いたのが本物の『メッセンジャー』なら、こんなおかしい書き間違いをすることは、絶対にありえないんだ」

「……つまり、どういふことだ？ 妹を殺したのは、『メッセンジャー』じゃないのか？」

「むーん、矛盾しているにやー」

「……ああつ、ひよつとしたらー」

浦駕さんが何かを思いついたようだ。

「こういうことですか？ 『メッセンジャー』は、実は二人いて、第四の殺人は『メッセンジャーA』の仕業、第五の殺人、つまり水樹さんを殺したのは『メッセンジャーB』だったと」

「えー、それはいくらなんでも考えにくいにやー。そんなにや、連続殺人鬼が複数犯だったなんて聞いたことないなり」

江戸釜先輩に思いきり否定されて、しゅんとなつてしまふ浦駕さん。そうッスね。俺も聞いたことないッス。ひよつとしたら数年後に、そういう推理小説が出るかもしれませんけどね。

「……今の麻蘭くんの推理が指し示す答えは、ひとつだと思ひます」

「えつ、栖川くん、わかつたのかね」

「麻蘭くん、わたしが言つても構わないかしら？」

栖川さんの鋭い視線に貫かれて、俺はゴクリと唾を飲みこんだ。そうか、俺の推理はやっぱ間違つていなかったんだと確信する。黙つて領いた。

「それじゃあ麻蘭くんに代わつて、わたしが言わせていただきます。『メッセンジャー』の正体は……水樹さんだった。虹村水樹さんが、連続殺人鬼『メッセンジャー』の正体だったんです」

『 』

今度は、誰も声を発しなかった。すこし時間を置いて、彰吾が「……はあ？ ちよとと、なんだよ、それ」と力無く反応するのが精一杯だった。

「水樹さんは『メッセンジャー』として、この別荘で誰かを殺そうとしていたのだと思ひます。そのために体調不良を装つて自室に閉じこもり、誰かが不意に訪れても大丈夫なよう、ドアの鍵をかけた。あらかじめ遺体に添える平仮名メモを用意して、窓から出ていった。ところがそこで予想外のことが起ります。水樹さんは殺害目標から思わぬ抵抗を受けて、逆に殺されてしまったんです」

彰吾が「ああ……」と低い呻き声を挙げる。

「水樹さんが狙っていたのは、名前に『ま』が入っている人間だったはず。この中で名前に『ま』が入るのは『まやみ・ゆた』の麻蘭くんと、『ささき・ますみ』の笹木さん、それから『えとがまらんぼ』の江戸釜くん、この三人だけです」

「た、たしかにそうだにやー。で、犯人は停電のとき、水樹嬢の部屋に忍び込んでドライヤーを使ったんだから、停電のときにアリバイが無かつた人物ってことになるにやー。てゆーか、そもそも水樹嬢がドライヤーを持つてきていたことを知っていた人物となるって？」

「……え？ あ、あたしですか！？ エーツ！ あたしが犯人だったのー！？ うそうそうそ、嘘ですよ？ ちっちゃ、違うのー！ 私、水樹ちゃんを殺してなんかいませんー！ ホントです、ホントにホント、麻聞くん、江戸釜先輩、お願い信じて！」

「信じます」

「麻聞くん、それはちよつとズルいやー」

「すいません、つい、反射で。」

「ドライバーは、水樹さんがあらかじめ荷物から出しておいたのだと思います。水樹さんは目的を果たした後、窓から自室に戻るつもりだったでしょうから、濡れた服を乾かすために用意していたとしても不自然ではありません。犯人はタオルで雨を拭くことも考えたでしょうけれど、たまたま水樹さんのドライバーが目に入ったので、そちらを使うことにした」

「ですよー、良かったー」

「俺も良かったです、笹木先輩。」

「なによりメモの五番目の文字、『だ』が、どこからやってきたのかという疑問が残ります。水樹さん自身が『メッセンジャー』だったわけですから、水樹さんを殺した犯人は当然、本物の『メッセンジャー』ではありません。しかし水樹さんが『メッセンジャー』に殺されたと誤認されるよう、メモと数字を偽装しようとした。数字が『5』だったのは、わたしたちがそう思っていたように、数字は殺害の順番だと思いついていたからでしょう」

ウンウンと同時に頷いている江戸釜先輩と浦駕さん。俺は顔を俯けたまま、栖川さんの後を継いで説明を続けた。

「犯人は水樹に襲われ、必死に抵抗して、逆に殺してしまつた。そして、水樹が『たしろ』が」と書かれたメモを持っていることに気づいた。文字数は五文字。第四の被害者が公表されたというニュースは、俺たち全員が知っていました。ああ、そうか、この子があの『メッセンジャー』だったのか。犯人はそう思ったことでしょうか」

「ふむふむ、それで？」

「犯人と言いましたが、実際のところ、これは正当防衛です。リビングにいる俺たちを呼んで、事の次第を説明すれば、その人は罪には問われぬ。ところがその人はそうしなかった。水樹が『メッセンジャー』という事実を隠蔽し、逆に水樹が『メッセンジャー』によって殺されたことにしようと考えた。そして、新しいメモを作つたんです。聞いたところによればメモの文字は、被害者の名前の、名字の最後の一文らしい。それならこの『が』を『だ』に書き換えてやれば、万事オーケーのはずだ」

「うみゆみゆ？ いやいや、なんでそこで『だ』になるのよ。水樹嬢の名字は『虹村』でしょ？ 『ら』でないとおかしでしょ」

江戸釜先輩がもつともな疑問を口にする。顔を挙げると、彰吾も同じように眉間に皺を寄せながら腕組みをしている。ふう、これだけ言ってもまだ白状しないつもりか。大状際が悪いからないぜ。

それじゃあ仕方がない。これで終わりにしよう。

「その人は、勘違いをしていたんですよ。水樹の名字を、兄である宇多田彰吾と同じ『宇多田』だと思つていたんです。そういう人物が、この中に一人だけいます。その人は、始めにこの山荘に辿り着いたとき、初対面の数人から自己紹介を受けました。まず最初に江戸釜先輩が。それから彰吾が。俺と笹木先輩、水樹はリビングの奥の方にいたから、彰吾が紹介してくれたんだよな」

突然の指名に、彰吾はあからさまに動揺する。

「ああ……そうだったかな」

「なんて言つたか、憶えているか？」

「え？ あれ、なんて言つたかな」

彰吾はその場で足踏みをすると、両手で頭を押さえて懸命に記憶を掘り起した。

「……ああ、ああ、思い出した。えーと、たしか、『あそこ』に立っているのがK大学の学生さんで、笹木真澄さんと、麻聞由汰くん。横のおかつば頭が、妹の水樹……って、あああッー？」

「そう。彰吾は水樹のことを『妹』だと紹介して、名字は口にしなかった。彰吾は婿入りして名字が変わっているけれど、水樹は『虹村』のまま。けどそんな事情を知らないその人は、水樹の名字も当然『宇多田』だろうと思いついてしまったんですよ。ですよ、ね、浦駕さん？」

遠くで雷鳴が響いた。

「……そうです。わたしが、虹村水樹さんを殺しました」

浦駕さんは妙な顔つきで上着の胸元に手を入れてると、内ポケットからなにかを取り出した。ゴトン。テーブルの上に置かれたのは、透明なビニール袋に包まれたナイフだった。刃先に布が巻きつけてあり、その端が赤黒く汚れている。

「これが凶器です。勿論わたしが用意したんじゃないやなくて、彼女がこれを持って襲ってきたんですよ。ですが、例え正当防衛とはいえ、水樹さんを殺してしまつたのは事実です。取り返しのないことをしてしまつたと思つています……本当に、申し訳ありませんっ」

そう言うが否や、浦駕さんはその場にしゃがみこんで土下座をした。おでこが床にピタリと張りついた、それはもう、見事なくらいの土下座だった。

俺は周囲の反応を伺う。笹木先輩は、まだ目の前で起こっていることの意味を完全には把握

し切れていないようで、ポカンと口を開けている。彰吾は憤怒と憐憫が入り混じったような複雑な表情で突っ立っている。栖川さんは凜とした姿勢を崩していない。そして江戸釜釜先輩は、目の前の犯人にはまったく興味を示さず、視線を頭上に彷徨わせながら、何かを思い出そうとしているようだった。しばらくして、「あー、そーにやのか」と気の抜けた声で言った。

『メッセンジャー』の第五の標的、本当は吾輩だったによるね」

「えっ、なんでですか？」

「だってほら、水樹嬢の部屋からなら、離れにあるお風呂が見えるなりよ。初めは吾輩が一番風呂の予定だったからねー。水樹嬢は、離れの風呂の明かりが点いたのを見て、我輩が風呂に入らんと勘違いしたんじゃないか。実際には身体が冷え切っていた浦駕さんに譲ったわけじゃないかも」

「んんん？ これで全部、つじつま合ってるの？ うーん、わけわかんないよー」

笹木先輩が頭を抱えている。

「ちよつと整理してみるによろ。」

まず大前提。水樹嬢は、連続殺人鬼『メッセンジャー』だった。被害者の名前と数字、そして平仮名のメモを組み合わせて『麻闇由汰が殺した』というメッセージを作ろうとした。そのためには、第五の被害者として名前に『ま』が入っている人物が必要だった。その標的に吾輩を選び、離れの風呂に入っているときに襲うつもりだった。

ところが浦駕さんの急な来訪で、風呂に入る順番が狂ってしまった。水樹嬢にしたら、ナイフを振り上げてみたものの相手が吾輩じゃなかったんで、ちよつと混乱したのかもしれないなりね。そして、その隙を突かれた。浦駕さんにナイフをもぎ取られて、逆に刺されてしまったなり。水樹嬢は返り血を浴びても大丈夫なよう、あの赤いレインコートを着たまま襲いかかった。だからナイフはレインコートの上から刺さっていたなりな。

浦駕さんは酷く混乱して、だけどそこで、水樹が用意していたメモの存在に気づいた。そのメモを見て、水樹が『メッセンジャー』であることにも気づいたわけね。……あ、そっか！ 水樹嬢のメモ、『たしろ』が『最後の文字が、『うらが』の『が』と一致するなりよ！ だから浦駕さんは、余計にメモの法則が『名字の最後の一字』だと思ってしまったなりねー。それで浦駕さんは、すっかり自分が殺人鬼の標的として選ばれたのだと思ひ込んでしまった。

しかし、相手が殺人鬼とはいへ、人ひとり殺したというのは、ちよつと大変なことだにやあ。面倒はごめんだと思つた浦駕さんは、それならいっそのこと、水樹嬢が『メッセンジャー』の標的になつて殺されたことにしようと思ひついた。物置にあつたメモ帳で新しいメモを作つて、そんで……離れに置き傘があつたによろね？ その傘を使つて雨を避けながら、死体を森の中に運んだなりな」

俺は「数字もお忘れなく」とさりげなくフオローしてやる。

「おお、そうだったによる。ナイフで木の幹に数字を刻んだ。水樹嬢の部屋は、このローテーブルの上の見取り図を見ればわかるなり。水樹嬢が窓から出てきたことがバレしてしまうと、彼女が『メッセンジャー』だったことが勘づかれてしまうかもしれないなり。それを恐れた浦駕さんは、電話を借りるフリをして玄関から外に出た。玄関には自分が着てきた雨合羽があつたから、それを身につけて水樹嬢の部屋に回り込むと、窓から侵入して鍵をかけた。床が雨で濡れたので、ちよつどあつた水樹嬢のドライバーを借りて乾かしていたら、急に停電になった。大慌てでドアの鍵を開けて、廊下からリビングに戻つた。雨合羽は畳んでポケットにでも入れておけばいいなりね。後でどさくさに紛れて、玄関に戻しておいたよ。」

……ああ、そういえば、あれは最初からおかしかったなりな。停電のとき、誰も吾輩の横や上を通らなかつたはずなのに、玄関脇にいたはずの浦駕さんが、明かりが点いたときにはもうリビングにいたなり。あれは浦駕さんが、どこか別のところから別荘内部に戻ってきたという確固たる証拠だったなりな」

酔つ払つた江戸釜釜先輩の証言だけじゃあ、信憑性に欠けますけどね。

「ううううう、スミマセンスミマセンスミマセン……」

驚いたことに、江戸釜釜先輩の長講釈の間、浦駕さんは上下座の姿勢を少しも崩さなかつた。海より深く反省しているようにも見えないが、少々、演技臭い感じがしないでもない。そんな浦駕さんを、彰吾は苦しい表情で見つめている。まあ、無理もない。妹が連続殺人鬼に殺されたと思つていたら、実はその妹こそが殺人鬼で、殺した犯人は正当防衛だったんだからな。

江戸釜釜先輩はチラリと浦駕さんを見て、それから深いため息を吐いた。

「ふみゆう。やーれやれ、これで一件落着なりね……。浦駕さん、警察来たら、自分から刑事さんに申し出ないとダメなりよー？ 自分がやりましたー、自首しますすーつてね」

彰吾は顔を伏せると、江戸釜釜先輩の提案に同意するように小さく頷いた。

「は、はい！ スイマセンスイマセン、私、もう、ホントになんて言つたらいいのーか！」

そのときだった。栖川さんがスツと、小さく手を挙げた。

「……江戸釜釜くん、ちよつと待つてもらえるかしら？」

「はにや？」

「浦駕さん。ひとつだけ、お訊ねしたいことがあります」

「は、はい！ なんでもお答えしますすー！」

わずかな沈黙があつた。考えをまとめながら、慎重に言葉を選んでいくようだ。そうして栖川さんは、きつぱりとした口調で言った。それは紛れもない断罪の言葉だった。

「正当防衛を隠蔽した………本当の理由はなんですか？」

「ハイッ？」

「なにを言ってるなりか栖川くん、だから浦駕さんはー」

「江戸釜くん、黙って」

「はい」

栖川さんつて、江戸釜先輩の後輩なんじゃないっけ？ どんだけ弱いんだ、この人は。

「そ、そ、そそそそそ」

浦駕さんの黒目が、左右同時にぐるりと回転した。

「ですから、それは、相手があの最狂最悪の連続殺人鬼『メッセンジャー』だったとはいえ、人をひとり死なせてしまったという事実が、わたしのような小心者には重すぎて……」

「奥さんに、金魚の餌を夕食に出された、と仰っていましたね」

今にも泣き出しそうだった浦駕さんの表情が、急に凍りついた。背筋がゾクリとする。栖川さんの表情から、慈愛に満ちた暖かみの一切が無くなっていた。その声にはただ、末期癌を宣告する医師の無情だけがあつた。

「答えてください。浦駕さん、貴方は何をされようとしていたんですか？ 貴方は先ほどから、

「自分の山荘に戻ろうとされてましたよね。森川荘に一人でいる奥さんが、『メッセンジャー』に襲われないか心配だから、いったん戻ってやりたいと。だけど浦駕さん、連続殺人鬼がもうこの世にいない」ことは、貴方が一番よく存知だったはずです。奥さんが『メッセンジャー』に襲われる心配なんて必要ないことを、あなただけは知っていたはずです。……ナイフを内ポケットに隠して、奥さんが待つ森川荘に戻って、貴方は一体、何をされようとしていたんですか？」

栖川さんの口から呪文のように流れる言葉が、突然の猛吹雪のようにリビングの空気を凍てつかせていく。浦駕さんは肩をブルブル震わせて、顔を蒼くして、そのまま床にめりこんで粹せうなぐらいに背を丸めている。俺は、思わず呟いた。

「なるほど……そういふことかよ……」

「えっ、なに、どういふことなの？」

「つまり、相手は既に四人もの命を奪っている連続殺人鬼ツス。正当防衛が認められ、情状酌量で刑が軽減される可能性は、かなり高い。つーか確実に無実ですよ。だけど浦駕さんは、その道を選らばなかった。そのかわりに、連続殺人鬼のナイフを持って、自分の別荘に戻ろうとした。そしてそのナイフで……『メッセンジャー』に便乗しようと考えたんだ。浦駕さんは、奥さんを、

第六の犠牲者として——」

そのときだった。

彰吾が浦駕さんに歩み寄ると、いきなり拳を振るった。

殴られた浦駕さんの小柄な身体が吹っ飛び、床に崩れ落ちた。江戸釜先輩がソファから跳ね

人形みたいに動いて、彰吾の背中に飛びつき羽交い締めにする。しかし彰吾は止まらない。ヒイヒイと声をあげながら、四つん這いで逃げる浦駕さんを追いかけて、馬乗りの姿勢になると、二度三度と拳を打ち下ろす。

「や、やめて、やめて……わたし、私だつて、好きで殺したんじゃないんです！」

両腕で顔を庇いながら、浦駕さんが叫んだ。その大声に彰吾の動きが鈍り、その隙を突いて江戸釜先輩が彰吾を浦駕さんから引き剥がす。

しばらくの間、彰吾と浦駕さんのゼエゼエという荒い呼吸音だけがリビングを支配した。それが済むと、今度は浦駕さんがすすり泣きしながら、恨み言を口にし始めた。

「……うっうっうっ、も、もういやだ！ こんなのはいやだ！ 今日だつて、浴室の電球が片方切れたから、麓まで買ってこいと命令されて。別に今晩中でなくていいはずなのに、妻はたかが電球一個のために、私を山荘から追い出したんだ！ ガ、ガソリンは途中で無くなるし、雨は冷たいし、ここに来てやっと思ってるかと思ったら、いきなり見ず知らずの女の子に殺されそうになるし！……いやだ。いやだ。もういやだ、たくさんだ！ どうしてわたしばかり、こんな理不尽な目に合わないやならないんだ！」

「うるさい、黙れ！」

俺は立ち上がった。ローテーブルの上のビニール袋をつまみあげて、ゆっくりと彰吾に近づく。彰吾は不思議そうな顔で俺を見上げた。

「ほら」

「ビニール袋を差し出した。凶器のナイフが入ったビニール袋を。」

「どうぞ」

わけがわからないという顔で、ナイフと俺の顔を交互に見る彰吾。

「どうぞ」

「いや、麻聞くん、僕は、別に……」

「憎いんだろ。水樹を、妹を殺した奴が、憎くて仕方ないんだろ。だったら、使えよ。ガキの喧嘩じゃねーんだ。お前なんかのパンチで殺れるわけねーだろ。サクツとやれよ、サクツと」

「違うんだ、麻聞くん、僕は、そんな」

「黙れよ。これ以上、俺をイライラさせんな、このボケが！」

俺の恫喝に全身をビクツと震わせた彰吾の姿が、やけに小さく見える。

「……まったく、妹が連続殺人鬼で、死んだ理由が正当防衛じゃあ、いくら憎くたってどうしようもないもんな。それがどうだ、相手側にも多少の負い目があるとわかった途端、責任転嫁に





は言い切れないけれど、少なくともうちの大学は違った。だからあれは、間違いなく二〇年前の出来事だったわけだ。

それが何年後、何十年後になるかはわからないけれど、いつかは俺も、あの事件を思い出のひとつとして、誰かに語る事ができるようになるかもしれない。

そのときは、事件の起きた年代を敢えて隠すのが面白いかもしれない。ちょうどあの年に、栖川さんが「面白かった」と褒めていた、講談社の新人作家のデビュー作品が皮切りとなって、『新本格ミステリ』という新たなジャンルが生まれたそうさ。その新本格というやつには、この手のトリックが多いそうだからね。

そういえばこの『新本格ミステリ』、今年で二〇周年記念を迎えるんだけど――

(終わり)



MYSCON8 present's

犯人当て小説『ザ・ラスト・トリック』解答編

2007.04.29

問題作成: 小田牧央 (\*the long fish\*) &  
近田鳶迹(MYSCON スタッフ)

\*the long fish\*: <http://www3.vc-net.ne.jp/~longfish/>

MYSCON 公式サイト: <http://myscon.net/>